

Q21 自閉症・情緒障害特別支援学級 における自立活動の指導とは

1 はじめに

自閉症・情緒障害特別支援学級には、発達障害に包括される障害である自閉症等と、選択性かん黙等心理的な要因の関与が大きいタイプの子どもで、その状態により通常の学級の指導では、その能力を伸ばすことが困難な子どもたちが在籍しています。

発達障害のある子どもには、障害や認知等の特性や発達段階に応じた自立活動の指導が求められます。また、心理的要因のある子どもには、心理的・情緒的原因への適切な対応により、学習上又は生活上の困難を自らの力で改善・克服できるように自立活動で指導することが求められます。

2 実態把握の視点

自閉症・情緒障害がある子どもの自立活動の指導に当たって、実態を把握する主な内容としては、以下のことがあげられます。

- ①基本的な生活習慣がどれだけ身についているか
- ②どのようなことに興味や関心があるか
- ③どれだけ人や物とかかわることができるか
- ④心理的な安定の状態はどうか
- ⑤コミュニケーションの状態はどうか
- ⑥社会性の発達の状態はどうか

3 項目及び目標の設定

1 健康の保持

(1) 生活のリズムや生活習慣の形成に関すること

覚醒と睡眠や学校生活のリズムがうまくとれない場合や、食事、排泄、衣服の調節等、規則正しい生活習慣が身に付いていない場合は、困難の要因を明らかにした上で、無理のない程度の課題から取り組むことが大切である。生活リズムや生活習慣の形成は、日課に即した日常生活の中で指導することによって養うことができるものである。そのため、家庭等との密接な連携の下に指導を行うことが求められる。

2 心理的な安定

(1) 情緒の安定に関すること

環境的な要因が心理面に大きく関与していることも考えられることから、睡眠、生活リズム、体調、天気、家庭生活、交友関係など、その要因を明らかにし、情緒の安定を図る指導をするとともに、必要に応じて環境の改善を図ることが大切である。

(2) 状況の理解と変化への対応に関すること

選択性かん黙の子どもの場合、本人が安心して参加できる集団構成や活動内容等の工夫をしたり、教師が付き添って適切な援助をしたりするなどして、情緒の安定を図りながら、それぞれの場面に対応できるようにする。

自閉症のある子どもは、急な予定の変更などに対応することができず、混乱したり不安になったりしてどのように行動したらよいか分からなくなる。このような場合には、予想される事態や状況を予告したり、事前に体験できる機会をつく

ったりする。

3 人間関係の形成

(1) 他者とのかかわりの基礎に関すること

他者とのかかわりをもとうとするが、その方法が十分に身に付いていない自閉症のある子どもは、まず、直接的に指導を担当する教師を決め、教師との安定した関係を形成し、やりとりの方法を大きく変えずに繰り返して方法が定着するようにし、相互にかかわり合う素地を作るようにする。そして、やりとりの方法を少しずつ増やして、言葉だけでなく、具体物や視覚的な情報を加えて分かるようにする。

(2) 他者の意図や感情の理解に関すること

自閉症のある子どもは、言葉や表情、身振りなどを総合的に判断して相手の心の状態を読み取り、それに応じて行動することが困難な場合や言葉を字義通りに受け止めてしまうため、行動や表情に表れている相手の真意を読み取れないこともある。そこで、生活の様々な場面を想定し、そこでの相手の言葉や表情などから、立場や考えを推測するような指導を通して、相手とかかわる際の具体的な方法を身に付けるようにする。

4 環境の把握

(2) 感覚や認知の特性への対応に関すること

自閉症のある子どもは、聴覚の過敏さのため特定の音に、また、触覚の過敏さのため身体接触や衣服の材質に強く不快感を抱くことが見られる。それらの刺激が強すぎたり、突然であったりすると、混乱状態に陥ることもある。そこで、不快である音や感触などを自ら避けたり、子どもの状態に応じて、それらに少しずつ慣れていったりするように指導することが大切である。なお、ある子どもにとって不快な刺激も、別な子どもにとっては快刺激である場合もある。したがって、個々の子どもにとって、快刺激は何か、不快刺激は何かをきめ細かく観察して把握しておく必要がある。

5 身体の動き

(5) 作業に必要な動作と円滑な遂行に関すること

自閉症のある子どもは、手足を協調させて動かすことや微細な運動をすることに困難が見られることがある。目的に即して意図的に身体を動かすことや手足の簡単な動きから始めて、段階的に高度な動きを指導することなどが必要である。また、手指の巧緻性を高めるためには、子どもが興味・関心をもっていることを生かしながら、道具等を使って手指を動かす体験を積み重ねるようにする。

6 コミュニケーション

(1) コミュニケーションの基礎的能力に関すること

自閉症のある子どもは、持ち主の了解を得ないで物を使ったり、相手が使っている物を無理に手に入れようとしたり、他の人の手を取って、その人に自分が欲しい物を取ってもらおうとしたりすることがある。周囲の者が、それらの行動は意思や要求を伝達しようとした行為であると理解するとともに、できるだけ望ましい方法で意思や要求などが伝わる経験を積み重ねるよう指導する。

(4) コミュニケーション手段の選択と活用に関すること

自閉症のある子どもは、言葉でのコミュニケーションが困難な場合には、自分の意思を適切に表し、相手に基本的な要求を伝えられるように、身振りなどを身に付けたり、話し言葉を補うために機器等を活用できるようにする。

以上、例示をしましたが、子どもたちの実態により必要とする項目を適切に選定します。